

一〇一五年一〇月～一〇一六年九月

碧海寿広

連載三回目として、表題の期間に出版された近代仏教関連の新刊書を紹介する。なお、今号に書評で取り上げられている本は、ここでは扱わない。

①エリック・シッケタンツ『墮落と復興の近代中国仏教』——日

本仏教との邂逅とその歴史像の構築』法藏館、一〇一六年七月

近代中国仏教が日本仏教を模範として自己変革を遂げていく過程を緻密に検証した、今期ベスト級の注目作である。前近代

の中国仏教において、ある時期からの日本仏教を特徴付ける「宗派」は、ほとんど存在しなかった。だが、近代中国の仏教

者たちは、過去の歴史に「宗派」の幻影を見出し、自国の未来のためにも「宗派」の再興を夢見た。そうした幻視が中国仏教

の学知や実践に何をもたらしたか、本書が示す見識は非常に奥深い。

②陳繼東『小栗栖香頂の清末中国体験——近代日中仏教交流の開

端』山喜房佛書林、一〇一六年三月

近代における日中仏教交流の先駆者、小栗栖香頂。その事績と思想の全容について、一次資料の整理と読解から明らかにした労作である。本書は二部構成であり、前半の研究篇では、小

栗栖の中国での足跡が丹念に辿られるとともに、彼の真宗布教の構想の背後についた、アジア主義的な思想の性格が考察される。後半の資料篇では、小栗栖が明治六年に中国各地で見聞したことを探り、詳細に記した『北京紀事』について、その原本影印と翻刻に加え、著者による日本語訳が掲載されている。

③仲村薰『楊仁山の「日本淨土教」批判——小栗栖香頂「真宗教旨」をめぐる日中論争』法藏館、一〇一六年四月

清末の代表的な居士仏教者である楊仁山（文会）と、南条文雄や小栗栖香頂ら大谷派僧侶たちとの、典籍の交換や教学論争について検証した著作である。特に、大谷派の海外布教において宗派公認的な位置づけにあった小栗栖の「真宗教旨」をめぐる論争から、日中の淨土教論の相違について比較検討している。

なお、本書は同著者による『日中淨土教論争』（法藏館、一〇〇九年）の続編である。

④中西直樹『殖民地台灣と日本仏教』三人社、一〇一六年六月

一八九五年の台灣領有開始から日本敗戦に至るまで、日本の仏教界は台灣にどう関与してきたのか、その全体像の解明に挑戦した力作である。既存の宗派単位の研究を超えて、各宗派の動向を俯瞰しながら、同時に宗派連合的な活動についても記述している。また、同時代の殖民地政府の方針や、現地の宗教事情などにも幅広く目を配ることで、個々の歴史事象の持つ意味を丁寧に読み解いている。今後、このテーマに関しては本書が基準的な著作となるだろう。

⑤大澤広嗣編『仏教をめぐる日本と東南アジア地域（アジア遊学196）』勉誠出版、一〇一六年四月

日本と東南アジア地域との交流について、特に僧侶をはじめとする仏教関係者たちに焦点を合わせた論文・コラム複数本を編集した著作である。執筆者たちの専攻は、歴史学・文化人類

学・宗教学など多岐に渡り、扱われる時代も近現代をとおして幅広い。先行研究のすでに多い東アジア地域に対して、東南アジア地域については研究が未成熟な段階にあるという状況下、本書の編者らが推進するような学際的な研究の試みは、とても意義深い。

⑥荒川正晴、柴田幹夫編『シルクロードと近代日本の邂逅——西域古代資料と日本近代仏教』勉誠出版、一〇一六年四月
白須淨眞氏の広島大学大学院の退官を記念して編まれた論文集である。計二九本の論文に加え、四本のコラムと、白須氏の略年譜および著作目録が掲載されており、浩瀚な一冊となっている。数多くの中国人研究者が寄稿しているところも目を引く。

収録論文は、西域古代資料に関するものが約半数であり、その他には、ヘディンの事績など近代シルクロード関連の研究や、近代の西本願寺の関係者を主に扱った諸論考が並ぶ。

⑦本多隆成『シルクロードに仏跡を訪ね——大谷探検隊紀行』吉川弘文館、一〇一六年九月

大谷探検隊による事業の歴史と、それに関する学術研究の展開について、探検隊メンバーの子孫でもある歴史学者が、平易

に論述している入門的な著作である。資料として掲示される数々の写真が、とても豊富で理解の助けになり、また著者自身の現地調査の記録もあわせて掲載されており、興味深い。探検隊にとすると、将来品の所在についても簡潔にまとめられており、こちらも初学者には便利である。

⑧ジラルデッリ青木美由紀『明治の建築家 伊東忠太 オスマン帝国をゆく』ウェッジ、一〇一五年一二月

二十世紀初頭の伊藤忠太による世界旅行のうち、特にオスマン帝国での彼の歩みを、日記や各種の図録を資料として描き出した作品である。「法隆寺建築キリシャ起源説」を心に携え旅立った忠太は、西方を目指して歩み、土地ごとの多様な建築文化を目の当たりにするなか、やがて東西文化の相互交渉という洞察に至る。その更新された認識は、大谷光瑞との出会いを通して、著名な築地本願寺の設計にもつながっていく。稀代の建築家にとってのアジア体験の意義を、生き生きとした筆致で論述した好著。

以上、広くアジア圏での近代仏教の展開に関する本を取り上げてきた。以下では、日本国内の動向を中心に扱った本を紹介していく。

⑨佐々木有一『近代の念佛聖者 山崎弁栄』春秋社、一〇一五年一〇月

「光明主義」で知られる山崎弁栄の教えと思想について、光明会の理事を務める著者が詳細に論じた本である。法然の信仰

に開眼し、西洋哲学やキリスト教の学びも通して独創的な「淨土教哲学」「超在一神的汎神教」を開拓した弁榮の思想の現代的な意義はどこにあるのか。弁榮のテキストについて、敬虔なスタンスから詳しく解説する著者の文章によって、研究者による光が当たりにくくこの近代の傑僧の魅力が遺憾なく伝わってくる。

⑩市川浩史『柏木義円と親鸞——近代のキリスト教をめぐる相克』
ペリカン社、二〇一六年六月

安中教会の牧師を勤め、伝道のかたわら社会批判や反戦運動にも尽力した柏木義円は、大谷派の寺院出身者であった。親鸞の思想研究を専門とする著者は、この事実を重視しつつ、キリスト者である柏木の人生と思想において、仏教とりわけ親鸞の教えがどのような影響を及ぼしていたのかを検討する。国家権力や伝統仏教に対する柏木の批判的な思想の由来は、キリスト教か、親鸞か、あるいはまた別の思想なのか、複眼的に考察される。

⑪永尾雄二郎、クリストファー・ハーディング、生田孝『仏教精神分析——古澤平作先生を語る』金剛出版、二〇一六年八月

真宗の信者であると同時にフロイトの信奉者でもあった「仏教者としての分析家」、古澤平作。日本の精神分析学の開祖である彼のこの二面性について、弟子の永尾雄二郎氏への聞き取りと、それに対する研究者らの解説から検討されている著作である。古澤がいかなる意味で仏教を信奉していたのか、その実

質が詳しく突き詰められるとともに、師の古澤に加え金子大栄などからも影響を受けた永尾氏の興味深い宗教観も、随所で披露されている。

⑫藤野豊『孤高のハンセン病医師——小笠原登「日記」を読む』六花出版、二〇一六年三月

国家によるハンセン病患者の絶対隔離政策に反対し、患者のために独自の治療を実施していた小笠原登は、大谷派の僧籍を有する僧医であった。そのため、彼の活動を支える協力者には、宗教関係者が少なからずおり、とりわけ浄土宗の人びとが多くいた（大谷派の人びとはむしろ国家寄りだった）。小笠原の日記をおもな典拠として、その実情を検証した著者は、「小笠原を支えた戦時下京都の仏教者、そしてキリスト者の存在は、近代日本の宗教史の研究対象ともなる」と的確に指摘する。

⑬吉田久一（著）、長谷川匡俊、宇都築子、永岡正己（編）『日本社会事業小史——社会事業思想の成立と挫折』勁草書房、二〇一五年一〇月

二〇〇五年に逝去した吉田久一の遺作として刊行された本である。吉田が日本近代仏教史とともに専門としていた、社会事業の近代史をテーマとした論考であり、多様な社会事業の思想と実践について、平易に論じられている。また、付録的な【解説】として、「吉田史学における仏教と社会福祉の研究」（長谷川匡俊）などの文章や、吉田の略年譜などが掲載されている。

⑭西山茂『近現代日本の法華運動』春秋社、二〇一六年七月

宗教社会学の大家が満を持して刊行した、近代法華運動に関する四十余年にわたる研究の集大成である。国柱会、本門佛立講、仏教感化救済会（法音寺）、立正佼成会、そして、創価学会。伝統と革新の狭間で伸張する法華運動の近代史が、手堅い理論的な構えのもと、明快に整理されていく様は圧巻である。著者の日蓮仏教の「再歴史化」に向けた情熱と、徹底した実証的研究の凄みから、読者それぞれが多く学びや教訓を得ることができるだろう。

⑮寺田喜朗・塚田穂高・川又俊則・小島伸之編著『近現代日本の宗教変動——実証的宗教社会学の視座から』ハーベスト社、二〇一六年六月

宗教社会学を専攻する著者らによる、さまざまなテーマを扱った論文集である。教団類型論と宗教運動論の架橋、近現代の新宗教団体の事例研究、地域社会における契約講のモノグラフ、政教分離訴訟の社会学的考察、人口減少社会における伝統宗教についての検討、穗積陳重の先祖祭祀論の分析、特高警察を事例にした戦時下の「宗教弾圧」の再検討に加え、コラムとして「世俗化論・合理的選択理論」「戦没者慰靈研究」「國家神道研究」の研究状況を整理した文章が収録されている。

⑯櫻井義秀・川又俊則編『人口減少社会と寺院——ソーシャル・キャピタルの視座から』法藏館、二〇一六年三月

近年、人口減少や過疎化の進行による「寺院消滅」が叫ばれているが、その現実はどうなっているのか。実態調査に基づく

考察が、宗派ごとにに行われている著作である。また、おおむね衰微する一方の今後の地域社会において、寺院が、僧侶が、寺にかかる女性たちが、どのような役割を果たすことができるのかについて、複数の論者が、さまざまな観点から論じている。現代日本仏教のアクチュアルすぎる問題に切り込んだ時局的な一冊。

⑰平山昇『初詣の社会史——鉄道が生んだ娯楽とナショナリズム』東京大学出版会、二〇一五年一二月

明治以降の「創られた伝統」である初詣の歴史的変遷について多角的に検討することから、近代の寺社参詣におけるツーリズムの影響力や、明治神宮の国民的な人気に象徴される都市大衆のナショナリズムの構造などを解き明かした、目から鱗が落ちるような内容に富んだ一冊である。いわゆる「國家神道」論に関しても、新たな観点から問題提起がなされており、広く近代宗教史の研究に対する重要な示唆が少なくない。

⑱佐藤久光『四国遍路の社会学——その歴史と様相』岩田書院、二〇一六年七月

四国遍路の起源、江戸時代の遍路の実態、そして近現代における動向まで、豊富な資料やデータを駆使した検証を行った研究書である。巡拝記の読み込みから遍路の具体的な姿を見通したり、寺院への納経料金の調査から遍路の総数の変遷を分析したりと、地道な作業から導かれる見解は説得的である。また、ドイツ人のアルフレッド・ボーナーが一九三一年に上梓した四

国遍路研究の本を、著者が訳出したことで得られた新たな知見も盛り込まれていて。

⑯ 藤田庄市『修行と信仰』岩波現代全書、二〇一六年九月

修行とは何か。修行者が体感する宗教の世界とは、いかなるもののか。長年にわたり日本宗教における「行」の実態を取り材してきた著者が、各種の事例に基づき鋭利な思索を行い、その成果を達意の文章でものしている。比叡山の好相行、東大寺の修二会、真言の八千枚護摩供、法然や山崎弁栄の念仏、臨済禪の大接心、等々。日本佛教が歴史をとおし今に至るまで、「行」の厚みによってその宗教性を維持してきたという真実が、鮮やかに示される。

㉐ 碧海寿広『入門 近代佛教思想』ちくま新書、二〇一六年八月

最後に拙著である。刊行後、有識者やネット民などから「真宗（大谷派）に事例が偏りすぎている」「近世と近代の関係が見えてこない」「知識人中心で民衆思想的な側面が不足している」「佛教の知識がゼロだとやや難しい」「著者近影の写真の目つきが悪い」などの批判や感想を受けており、こうした意見に応えうる近代佛教思想の著作の作成を目指して、今後も会員各位とともに精進していくことを願う。

執筆者紹介（執筆順）

中尾 堯（立正大学名譽教授）

圭室 文雄（明治大学名譽教授）

林 淳（愛知学院大学教授）

守屋 友江（阪南大学教授）

本多 彩（兵庫大学共通教育機構准教授）

安中 尚史（立正大学教授）

坂井田夕起子（愛知大学国際問題研究所客員研究员）

福島 栄寿（大谷大学教授）

岡田 正彦（天理大学教授）

岩田 真美（龍谷大学准教授）

長谷川琢哉（親鸞佛教センター研究員）

陳 繼 東（青山学院大学教授）

武井 謙悟（駒沢大学大学院人文科学研究科博士後期課程）

小林 悅道（大正大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学）

繁田 真爾（明星学園教諭）

小島 敬裕（津田塾大学准教授）

塚田 穂高（國學院大學兼任講師）

碧海 寿広（龍谷大学アジア佛教文化研究センター）

〈彙 報〉

日本近代佛教史研究会第二三回研究大会は二〇一六年六月四日（土）、東京都品川区の立正大学において開催された。研究発表・特別企画は次ぎの通りである。

研究発表

〔第1部会〕

同和推進本部の活動と高木顯明の僧籍復権運動

福井敬（大正大学大学院）

清沢満之の前期思想について

長谷川琢哉（親鸞佛教センター）

清沢満之における「自力／他力」再考——「修養」という語に着目して

名和達宣（親鸞佛教センター）

占領下の戦犯教誨師ノート

工藤信人（佛教タイムス）

近代における日蓮著『立正安國論』の受容について

矢吹康英（立正大学大学院）

佛教各宗と戦後七〇年

明治期における観音のイコノロジー

君島彩子（総合研究大学院大学）

近代佛教史における久保角太郎の位置づけ

橋口豊彦（在家佛教こころの研究所）